

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (93) イエフ王朝(841-752BC)

イエフの新しい王朝も、5代目まで継承しました。イエフ28年、ヨアハズ17年、ヨアシユ16年、ヤロブアムII 41年、そしてゼカルヤに至ります。預言者エリヤの言葉に従い、父イエフはオムリ、アハブと続いたバアルの信仰を信奉する北イスラエルの王朝を「謀反」の形で滅ぼしました。けれども北イスラエルの最初の王ヤロブアムが投げ所とした金の子牛を捧げたベテル、ダンの神殿を取り除くことはありませんでした。子ども達がイエフの路線を継承していきましたが、これは神のみ心ではありません。イエフの時代になるとアラム(現シリア地方)のハザエルが台頭し、たえずイスラエルを侵略し始め、国は衰退していきました。(列下10:32)

息子**ヨアハズ**はユダの王、アハズヤの子ヨアシユの治世第二十三年に、イエフの子ヨアハズがサマリアでイスラエルの王となり、十七年間王位にあった。彼は主の目に悪とされることを行い、イスラエルに罪を犯させたネバトの子ヤロブアムの罪に従って歩み、それを離れなかった。彼はアラムの圧迫が激しく、一度だけ主に祈り、その時は侵略から逃れることが出来て、イスラエルの民は以前のように自分たちの天幕に住めるようになった(列下13:5)とあります。この時代も、庶民は天幕が住居だったようです。



エリシャに命じられ弓を引くヨアシユ William Dyce

た。そうすればあなたはアラムを撃って、滅ぼし尽くしたであろう。だが今となっては、三度しかアラムを撃ち破ることができない。」(列下13:19)

その子**ヨアシユ**が後を引き継ぎますが、やはりアラム軍に侵略を受け続けました。この時ヨアシユは死の床にあった預言者エリシャに助けを求めに行き、彼の面前で、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と泣いた(列下13:14)ほどエリシャを信頼し、必死だったのです。エリシャは自分の手をヨアシユの手の上の上にのせて東側の窓を開け、「地面を矢で射よ」と命じます。ヨアシユは三度だけ試しました。神の人は怒って王に言った。「五度、六度と射るべきであった。そうすればあなたはアラムを撃って、滅ぼし尽くしたであろう。だが今となっては、三度しかアラムを撃ち破ることができない。」(列下13:19)

エリシャの優しさと厳しさが同時に示されています。この後、エリシャは死にました。ヨアシユはエリシャの祈りに支えられ、何とかアラムを打ち破りました。これを妬んだユダの王アマツヤが戦いを挑みました。ヨアシユは警告したものの、聞き入れられず、戦闘になりました。ユダに勝利し、城壁を破壊し、エルサレムの神殿の祭具、王宮の宝物庫の金銀、人質を取って凱旋することが出来ました。ユダに勝利し、安定して、後を継いだ**ヤロブアムIII**は信仰の点では祖のヤロブアムと同じく、主の目には悪でした。しかし、イスラエルの神、主が、ガト・ヘフェル出身のその僕、預言者、アミタイの子ヨナを通して告げられた言葉のとおり、彼はレボ・ハマトからアラバの海までイスラエルの領域を回復した。主は、イスラエルの苦しみが非常に激しいことを御覧になったからである。つながれている者も解き放たれている者もいなくなり、イスラエルを助ける者もいなかった。しかし、主はイスラエルの名を天の下から消し去ろうとは言われず、ヨアシユの子ヤロブアムによって彼らを救われたのである。(列下14:25-27)と記されているように、ヤロブアムの時代に領土は回復し、繁栄も味わい、平穩に過ぎ、彼は長期間の在位を守りました。ヤロブアムがアラムの首都ダマスコを奪いました。やがて、アラムが次第にアッシリアに侵略され、衰退していきます。この時代に預言者ホセア、ヨエル、ヨナ、アモスが働いています。

その子**ゼカルヤ**は即位後、6か月で家臣のシャルムによって民の前で殺害され、イエフ王朝が終わりました。短命に終わったゼカルヤの事績はどこにも見つけることはできません。そのすぐ1か月後に、軍の司令官メナヘムがシャルムを討ち殺しました。メナヘムは同胞にも残忍な王でした。そして台頭してきた新アッシリア帝国(934-609BC)(現イラク地方)に多額の銀を貢ぐことによって、北イスラエルを持ちこたえさせていくしかありませんでした。